

# ベルギー・キリスト教民主主義試論

土 倉 莞 爾

## 一 起 源（第一次大戦まで）

ベルギー独立の原因は、国民意識の覚醒やフランスの秘密工作よりも、むしろオランダ国王ウイレム一世の拙劣な統治に対する反感に求めるべきであり、また独立を成功に導いたのは、自由主義者とカトリックが統一同盟のもとに協力したことにあった（栗原、一九八二、八三）。この協力はオランダからの独立達成を第一に掲げたからであるが、カトリックが強硬な教権主義路線をとらなかつたがゆえに可能になったことである。しかし、国家と教会の関係を見ると、カトリックは国家の諸制度で保護されており、教会財産の優遇や国家財政からの教会への支出は相当程度のものであった（津田、二〇〇一、三二七）。教会と国家の分離に関する議論については、宗教上の秘蹟よりも民法上の結婚を先行というほど一つの目的しかなかった。カトリック教徒は屈服せざるをえなかつたが、その代償に国家が教区聖職者の手当と年金を引き受けることになった（Dumont, 1993, 62. デュモン、一九九七、六八）。

一八五〇年までにユニオニズム（統一同盟）が崩壊すると、学校教育の管轄権をめぐる教会と国家の対立を中心に、

教権・反教権の立場で政治勢力は二分された。この分裂により、カトリックと自由主義の二大政党形成に着手され、続いて、八〇年代には、産業化とそれに伴う労働運動の高揚に対応し、階級クリーヴィッジの制度化が始まった（津田、一九九一、一一三）。ブラバント *Brabant* 社会党は一八七八年にブリュッセルに設立され、同年、エデュアル・アンセール *Eduard Ansele* はヘントに織物職人を動員した。第一インターナショナルの支部がフランデレンに社会党を創設したのは一八七七年であった。一八八五年、社会主義の指導者はこれらの諸勢力を集中させてベルギー労働者党 *Belgian Werkliedenpartij (BWP)* の結成を指導した（*Witte, Craeybeckx & Meynen, 2000, 77*）。しかしながらこの制度化は、先に活性化した宗教クリーヴィッジの制約を受けている。社会主義勢力は、労働社会層をすべて動員することはできず、労働運動は、キリスト教労働運動と社会主義労働運動に二分された。労働党は反教権派の労働者を組織化するにとどまり、カトリック勢力は、宗教政党の名の下に、全階層を擁することに成功した（津田、一九九一、一一三）。カトリックは富裕階級や資本主義と固い絆を持っていた。ブルジョワジーは教会が社会秩序を維持するための理想的な道具であると見なしたからカトリックの保守的な社会行動を援助した。資本主義的原則、とりわけ所有権は決して問題にならなかった。資本家階級を上におく社会のヒエラルキーと階級和解は中心的なテーマだった。資本と労働のどんな相克もキリスト教的慈愛の精神において宥和されなければならなかった（*Witte, Craeybeckx & Meynen, 2000, 81*）。カトリック教会は、カトリック教のイデオロギーに支えられた、国家から自由で自立的なサブカルチュアを形成することにより、世俗化に歯止めをかけ、同時に選挙法改正に伴う新有権者の確保を図った（津田、一九九一、一二四）。

一八八〇年代のベルギー社会は社会経済的には産業化が急速に発展し、それにもなう諸問題の発生を見た。政治

的にはそれまで優位にあった自由主義政党が後退し、それに代わり一八八四年にカトリック単独政権が成立した。カトリック政権は第一次大戦まで継続・安定して、最大政治勢力としての地位を維持した（津田、二〇〇一、三〇三―三〇四）。ベルギーでは、古い貴族は婚姻を通して豊かなブルジョワの家族と結合し、「土地所有よりも動産の方がより重要となった」として株式会社の大重役になっていった。他方、ブルジョワジーは自由主義者の教育政策に反対し、また社会主義者の台頭を怖れてカトリックに走っていった。その結果、カトリックはたしかに貴族に支持されているが、間違いなくブルジョワジーを代表するものであるということが出来る（西川、一九七七、一三九―一四〇）。

一八八四年選挙でのカトリック政党の躍進は、自由主義政党からカトリック政党への政権交替をもたらした。この政権交替の直接の原因は、一八七九年から八四年の学校闘争といわれるカトリックと自由主義の対立であった。宗教が重要な政治争点となった一八五〇年・六〇年代に、自由主義政権は世俗国家政策を展開し、教会財産への国家規制やルーヴェン・カトリック大学の研究費の教会独占を阻止する法律を提出した（津田、二〇〇一、三〇五）。一八七八年選挙では、断固とした反教権主義綱領を提出した自由主義者が彼らの期待以上の勝利を収めた。一八七九年七月一〇日、彼らはファン・ハンベーク Van Humbeek 法を通過させたが、それは国家が初等教育を引き継ぐことを明文化するものだった。教会は、とくに学校監視の権限の廃止、聖職者の平信徒との交代、初等学校での宗教教育の縮小化によって締め出された。その法律はカトリック教徒から「災いの法律 *loi de malheur*」と名づけられ、さらに政府主導によるヴァチカンとの外交関係の断絶（一八八〇年）、中等教育法（一八八一年）、初等学校への出席の義務化に関する法律（一八八三年）が続いた。このように自由主義の勝利のインパクトとその余波は極めて容易ならざるものであった（カリヴァス、二〇〇〇、九五）。一八七八年の自由主義者の勝利は教皇権至上主義者の攻勢を激化させ

た(カリヴァス、二〇〇〇、九七)。

一八八四年選挙でのカトリックの勝利は宗教を政治的光景における恒久的な制度的特徴にした。選挙の潜在能力を確立することで宗教は右翼勢力が保守からカトリックに変わることを受けた。「連盟[Fédération]」の総裁であるオーギュスト・ベールナール Auguste Beernaert は一八八四年選挙を前にしてカトリックに直接呼びかけた。街頭では人々は「カトリック万歳! Vivent les Catholiques!」と叫んで歓呼した。この選挙でのカトリックの成功はたいいていのベルギーの学者によってベルギーにおけるカトリック政党の生誕と考えられている。一八八四年以前の保守政党はカトリック政党になった(Kalyvas, 1996, 191)。教会による空前の大衆動員の支援を受けて復活した保守主義者(以降、カトリック政党となる)は一八八四年選挙に勝利した。彼らは、反教権主義的な自由主義者の立法のほとんどのに反対したとはいえ、穏健な進路をとり、教会綱領のもっとも極端な解釈を拒否した。もっとも重要なことはカトリック政党が国家の自由主義的な諸制度に挑戦しなかったことである(カリヴァス、二〇〇〇、九九)。

一連の継続的なカトリックの政権は慎重に親教会政策を追求した。そのことは宗教とイデオロギーにそってベルギーにおける社会的政治的柱状化を強化することになった。と同時に、政府は社会的緊張を変えたり、減じたりする方向を試みた。一八八〇年代はカトリック政党がベルギー社会における宗教の役割に関する争点の範囲で自由主義派の反対を無視するほど議会で多数派になることはできなかった。しかし、一八九三年後は、カトリック派の政治家たちは議会で十分な多数派を享受し、民衆的な基盤を強化し、それに応じて行動した。一八九五年の教育法は公立小学校における宗教教育の位置を強化し、すべての私立学校は国家が制定したカリキュラムと国家視察を受けられるように国家認可が行なわれるようになった。この目標を達成した後、カトリック勢力は私立の(大部分はカトリック系

の) 小学校に国家交付金のレベルを上昇させるように積極的に試みた。この改革案は義務教育への動きと密接に結合していた。一九〇〇年には人口の十六%がまだ読み書きができない人たちであり、社会経済的考察は非識字を根絶することを至上命令とした。ただ、反教権派はこの法案に断固として反対であり、一九〇〇年以降の増加した議席は、一九一四年までこの法案可決を妨げた。この年になって義務教育が私立学校への十分な交付金をともなって最終的に実施されることになった (Lamberts, 1999, 341)。

一八八〇年代後半には社会主義労働運動が拡大し、それに対抗して、カトリック勢力の側も労働運動の組織化を開始した (津田、二〇〇一、三〇七)。一八九〇年、カトリックのベールナル政権は選挙法改革に青信号を出した (Lamberts, 1999, 336)。ベールナルは成功した保守政治家の一人であった (松尾、二〇〇〇、八〇)。ベールナルは政治的には穏健であったが、カトリックの指導者として行動した (Kalyvas, 1996, 192)。複数投票制の普通選挙権はベールナル政権によって相次ぐ一連の示威行動や暴力的なストライキに対する譲歩として承認されたものだった (Witte, Craeybeckx & Meynen, 2000, 86)。一八九三年、選挙権は目立って拡大された (土倉、二〇〇三、一〇五)。全体としてみれば、新しい選挙制度はカトリックにとくに有利なようになっていた。自由党は一八九三年以降は勝算のある候補者を立てることが難しくなってきた。フランデレンではカトリック党に圧倒され、ワロニーでは労働党BWPに制覇された (Lamberts, 1999, 337)。それまで、当分の間、カトリックの相互援助団体、労働組合、協同組合などは、社会主義者に比べてメンバーを集めることに成功していなかった。一八九一年、これらのカトリックの様々な諸組織が他の民衆的な結社も集めて「ベルギー人民連盟 Belgian People's League」を結成した (Lamberts, 1999, 339)。

カトリックは、家族中心の価値観、私的財産としての土地所有の尊重といった農民のメンタリテイが、社会主義や個人主義への防波堤になると考えるようになっていた(津田、二〇〇一、三二五)。農民の側からの働きかけではなく、聖職者の活動を中心にカトリック勢力の側の働きかけが、農民の組織化を進めた点は特徴的である(津田、二〇〇一、三二六。Lamberts, 1999, 339)。教会と宗教は長い間農民共同体に深く織り込まれていた。そしてカトリック党は農業利益の伝統的な擁護者だった。キリスト教の価値を体现していた農民はカトリックにとって信仰の擁護者であり教会の柱であった。農民の所有地はあまりにも大切なので、農民は法と秩序を真っ先に望んだ。農民は社会主義、物質主義、個人主義に対抗する砦だった。教会は農民をあきらめるつもりはなかった。小農民所有地の創設は社会主義の浸透に反撃するためのカトリックの戦略の鍵となる部分だった。フランデレンの小農民と農業労働者の社会的地位は悲惨なものだった。彼らの生活は苦勞の終わりのない継続だった。彼らの生活条件は当時の産業プロレタリアートのそれより悪かった。多数の農民はアメリカ合衆国に移民した。また二〇万人以上の者が一八九〇年から一九一〇年の間にワロニーとフランスに移った。数千人の農業移住労働者がワロニーと北フランスの農場で搾取された。他の者は最も近隣の産業の中心地に補助収入を求めて日々の生活を変えていった(Witte, Craeybeckx & Meynen, 2000, 91-92)。

地方のレベルでは、カトリック勢力は基本的に人々の生業の利益を擁護することを目指す組織を設立した。地方の、そして最終的には国内のレベルで中産階級 *middenstand* をとくに組織しようとしたのはカトリック勢力だった。彼らは、職人、店主、店員は労働と資本の間の必要な緩衝器であり、同時に教会と家族の伝統的な価値と制度の維持のための最良の保証であると考えた。民衆のカトリック組織とカトリックの統治政党の間の関係は年とともに緊密に

なっていた。カトリックの指導層は、彼らの政党が今までどおり保守階級と中産階級のものだけでなく、カトリックの労働者階級の支持を得ることも重要なのだと知っていた (Lamberts, 1999, 339)。

一八九五年に独立したキリスト教民主主義の労働者政党が出現しようとした時、それは若い芽のうちに摘み取られた。カトリックの聖職者たちは、教会が社会に影響力を保持しようとするならすべてのカトリック勢力の団結が必要であると信じていた。とはいえ、カトリックの労働者たちは他のカトリックの諸組織に深く関与していたが旧式のカトリック党を支持することを喜ばなくなってきた。当分の間、彼らは政治権力をあまり行使できないことに甘んじていた。カトリックのブルジョワジーが妥協するのをとくに喜ばなかった結果、キリスト教民主主義者との裂け目が起きたのは、ダーンズ Daens が親フランデレンのカトリック逸脱運動を東西フランデレンの南部地域に指導した時から例外である (Lamberts, 1999, 339)。一八九〇年代を通して、ダーンズは東フランデレンのカトリックの労働者と農民の連合組織を作ろうとした (Conway, 1996, 191)。

フランデレンのしばしば小さな村に住む通勤者であった地方の労働者が最初の標的となった。地方の村司祭者はカトリック農民組合のメンバーであった農業労働者はやがてカトリック労働組合の組合員証をもった産業労働者になってゆくだろうと確信していた。社会主義者の労働運動がBWPを頼りにするようにキリスト教の社会組織はキリスト教民主主義の政治組織を探し求めていた。だが行なわれるより言うほうが易しかった。カトリック政党と教会の優先権は議会と政権の支配を保持することにあった。したがってカトリック陣営内の統一が必須であった。社会主義が影響を及ぼし始めている時だけに、聖職者とカトリック系保守的ブルジョワジーの支配はあまり問題にされなかった。カトリックの統一と議会多数を脅かす妥協、とくに「一人一票」の原則は問題外だった。カトリック労働運動の指導

者たちは、選挙期間中、カトリックの団結の原則と聖職者の權威に反対する自立性は持たなかった。保守的ブルジョワ的なカトリック政党内での自律的民主的勢力の発展は許容されなかった (Witte, Craeybeckx & Meynen, 2000, 84)。

祭司ダーンズは知られるべきである。ダーンズはアアルスト Aalst とその近辺の労働者、小農、季節労働者、教員、雇用者の苦境に心を痛め援助した。これによって保守的なフランス語系のカトリックの指導者たちの怒りを買わないわけにはいかなかった。ダーンズ主義 Daensism は労働運動ではなかったが、上流階級に対する下流階級の嫌悪感を活性化させた。それは社会主義が反教権主義のスタンスを取ることで社会主義を支持しない人たちに一つ代案となった。すなわち、キリスト教的で、民主的で、フランデレン的という代案だった。ダーンズはこの運動を指導して、一八九二年のキリスト教人民党 Christelijke Volkspartij の創設以降は議会に選出され、男子単記投票普通選挙権と社会改良政策を要求するキリスト教人民党左派に属した。やがて、地方の司教ステイルマンズ Stillemans、保守派議員の頭目シャルル・ブースト Charles Woeste、教会、君主を含む強力な連合がダーンズに反対する。教皇さえも干渉し、ダーンズにミサを読むことを禁止した。カトリック既成秩序からの無慈悲な圧力のもとで、ダーンズへの支持はだんだん小さくなる。そしてキリスト教民主主義の党へのインパクトも減少した。ダーンズは一八九八年教会から離脱した。そして急速に左翼に移行した。ダーンズの社会主義との連携は教会の許容できないところだった。レオ十三世は一九〇五年ダーンズ主義を非難し、ダーンズの運動が最終的に没落するよう圧力をかけた。ダーンズ主義の抹殺は、カトリック陣営の全てがいかに聖職者やブルジョワジーの支配下に置かれているか、の一例を示すのみだけではない。キリスト教民主主義翼の躊躇する運動の持続をもまた示している。一八九〇年の「反社会主義労働者協会 Anti-Socialistische Werkliedenbond (ASW)」は普通選挙権の要求を支持しなかった。カトリックの労働組合は選



挙権拡張を要求する抗議運動に加わることに失敗した。一八九一年、穏健そのもののコーポラティズム的な「人民協会 Volksbond」は議会への進出を求めてリストへの高い代表参加をカトリック指導部に求めたがその甲斐もなかった。聖職者がキリスト教民主主義者をカトリックの運動の中の一つの独立した集団であることを認識するのは一九〇五年になってからである。聖職者はキリスト教民主主義者が国政選挙に立候補し、独立した綱領を持つことを認めしたが、カトリックの政権を危うくするものではないという条件のもとにすぎなかった。キリスト教民主主義者はカトリック階級構造の一部分として認識されたのであった。全般的に言えば、カトリック政党の議会多数はしだいに減少しつつあり、カトリック保守派はもはやいくつかの選挙区ではカトリック労働者の支持なしには最早やって行けなくなつたことは明白だった。キリスト教民主主義の運動は政府の社会政策に影響をあたえる圧力団体となつたのである (Witte, Craeybeckx & Meynen, 2000, 84-85)。

アメリカの政治学者カリヴァスによれば、この時期のベルギーのカトリック勢力の成功は、集権的な宗教構造がなければ不可能であつたと言う。穏健派のリーダーシップのもとで統一性を強化するための教会の能力は決定的に重要であつた (カリヴァス、二〇〇〇、一〇七)。教会の強制力が確認されるのは、祭司ダインスの率いるフランデレン人民カトリック運動が、一八九〇年代に、同様のやり方で抑圧された時のことである (カリヴァス、二〇〇〇、一〇八)。教会とは本質的に不平等な社会である。それは二つのカテゴリーの人々から構成される。聖職者と信徒である。支配者のみが行動を起こし管理する。大衆の義務は統治されることを受け容れることであり、指導する者の命令に従順さをもって従うことである (Kalyvas, 1998, 297)。

民衆的な組織はしだいに全国的なカトリック政党により大きな影響力を行使しようと試みた。そのことは党が、さ

さまざまな階級を基盤として、労働者、農民、中産階級に対して代表の保障をともなった団体政党 *standenpartij* への転換を有利にした。この目標は最初に地方レベルで実現され、全国的なレベルの実現は一九二二年までなされなかった。しかし、第一次大戦以前にカトリックの労働者は政党と政権の中で彼らの立場を強化することを成し遂げていた (Lamberts, 1999, 340)。

一八九四年選挙では、ベルギー労働党は二八議席、自由党は二〇議席、カトリック党は一〇四議席獲得した (Witte, Craeybeckx & Meynen, 2000, 81)。しかし、ヘントの社会主義組織はすべての階層を包摂することはできなかった。この要因としては次の二点が指摘できる。第一に、社会主義は労働者階級の利益を掲げるほかに、反宗教・反教会の立場を強く打ち出した。これは一方でカトリック政権打倒のためには自由主義者との協力を拒まないという選択を可能にしたが、他方で階級間闘争という基本的性格はあいまいにならざるをえなかった。第二に、社会主義はインターナショナルリズムを重視し、地域言語の尊重を要求するフランデレン主義に反対する立場をとった。オランダ語系の労働者の不平等の問題は考慮されず、むしろフランス語の習得が生活の向上を可能にするとして推奨された。この反教会主義と反フランデレン主義は、農民、中間層、労働者の一部やフランデレン主義者の多くを社会主義組織から遠ざける結果となり、後に見るようにこれらの階層はカトリックに包摂されて組織化されていくことになる (津田、二〇〇一、三二二)。

旧来の保守的なカトリック勢力は、労働者を経営者と同一の組織に編成すべきであるとし、教皇権至上主義者は、社会主義の階級闘争を否定して、社会調和を実現するコーポラティズム秩序の形成を主張した。一八九一年に、ヘレプットの指導により設立されたベルギー国民同盟はコーポラティズムの考えに基づき、教区・市町村単位での雇用主

と雇用者の混成組織から構成されていた。しかし、次第に保守派の影響力に対抗するキリスト教民主主義労働運動が拡大し、国民同盟は一九〇〇年以降、分裂を深めていく(津田、二〇〇一、三二二)。カトリック社会的進歩派—今やキリスト教民主主義者と呼ばれる—は議会や政権の中でも地位を強化した。比例代表制のおかげでカトリック党はさまざまな特殊利益を代表する一つの組織にしだいに変わりつつあった(Lamberts, 1999, 337)。カトリック勢力は彼らの社会組織を設立するのに忙しかった。社会主義的労働者の世俗主義とは対照的にキリスト教労働者の運動はレオ十三世の教皇回勅『レールム・ノヴァールム *Rerum Novarum*』(一八九一)やコーポラティズム思考といったカトリックの社会教説の影響を重厚に受けていた。カトリックの社会理論は階級間の協力や社会調和を教えていたからこの理由によってブルジョワジーはカトリックの労働運動を社会主義者のそれよりも受け容れやすいことを発見した(Lamberts, 1999, 338)。松尾秀哉によれば、『レールム・ノヴァールム』によって、キリスト教民主主義の存在が西欧世界で初めて正当化されるという重大な意味を持つと言う(松尾、二〇〇〇、七五)。カトリック勢力が労働者に向けて行なった政策を分析すると、カトリックの政権は「サブシディアリティの原則 *subsidiarity principle*」に導かれ調和的な「中産階級の社会」を作ることを目指していたことがわかる(Lamberts, 1999, 343)。コーポラティズムは一八九〇年頃あきらめられていた。したがって論理的には分離した組合に新しい観念が必要だった。レオ十三世の『レールム・ノヴァールム』は教会が近代世界に接近することを指摘し、マルクス主義に対して全面的な正面攻撃を開始した。教皇はコーポラティズムの構造をより好んだが、反社会主義に向けたカトリックの先鋒になるような労働者だけの組合という概念も受け容れた。だがカトリック労働組合も強い束縛下におかれた。彼らは資本の核心的原則から離れることは出来なかったし、雇主と調和的な協力を進めなければならなかったし、交渉を通じて平和的な解決

を追求しなければならなかったし、ストライキを制限され、社会的階梯の上部から発せられるいかなる譲歩も受け容れなければならなかった。同業組合 *guilds* はいくつかの都市ではキリスト教系の組合に衣替えして、健康サービスや結社組織といった社会主義者の丹念なネットワークの向こうを張った。これらの行動は社会主義者に対抗して健康保護や慈善団体を包含した完全な労働運動を形成しようとしたから労働組合の設立を超えたものとなった (Witte, Craeybeckx & Meynen, 2000, 83)。

カトリックはフランデレン運動をフランデレンのオランダ語系住民の文化的・経済的・政治的な進出を目的とする社会闘争と位置付け、労働運動とフランデレン運動は、目的を共通にする二つのアプローチであると考えた。一九一二年にルッテンにより設立された、キリスト教組合総同盟 *Algemeen Christelijk Vakverbond (ACV)* は、フランデレンで拡大し、両者の結びつきは第一次大戦後の民主化過程において、反社会主義の立場に基づく協力を通してさらに強まっていく (津田、二〇〇一、三二四)。カトリック労働組合への支持のうねりは自然には起きなかった。カトリックは初期においては社会主義者の労働組合に全加盟者数において及ばなかった。しかし数名の地方の司祭やカトリックの指導者たちは目的を貫いた。そして一九二二年までに彼らは反社会主義的な全国的な組合 *ACV-CSC* を組織できた。その二年後、*ACV-CSC* は合計六五、〇〇〇名の加盟者を数えた。カトリック系健康保護部門もまた確実に拡張した。かつて教会の社会主義イデオロギーに染まっていた地方の司祭たちが組織化の原動力となった (Witte, Craeybeckx & Meynen, 2000, 83)。

一九一四年以前三十年間の連続したカトリック政党の政権はユニークなことであり、ベルギーのカトリック政党がヨーロッパの他の諸国が手本にするようなモデルになったことは驚くべきことではない。しかしながら、それは統一

した組織ではなかった。中央組織は存在しなかった。自由主義者やその後のベルギー労働党 *Parti Ouvrier Belge* の断固とした反対に直面してカトリック政党は統一を保持していたが、それは議會議員、地方の選挙組織、社会組織の形式ばらない連合にとどまっていた (Conway, 1996, 191)。

最後に、この時代に地域・言語利益の制度化が政党においてあまりなされなかったことについて、ベルギーの研究 者ハイセにしたがって、述べておきたい。政党レベルにおける地域クリーヴィジの低い制度化は、政治的志向を持ったフランデレンとワロニーの民族主義が一九二〇年代に政党システムが凍結した後に勃興したという事実に戻る。国家の選挙制度の変更が、言語紛争の表出が政治問題になることを遅らせることを助けた。十九世紀の三分の二の期間、ベルギーのすべての選挙区は多数代表制によって議員を選んでいた。複数投票制ながら普通男子選挙権が導入された時、それは自由党選出の議員を一掃する脅威をあたえた。それは圧倒的な田舎のカトリックのフランデレンを圧倒的な社会主義の産業化されたワロニーと対決させることになった。そのような地域対立はフランデレンの苦情に新たな打撃となったが、政治制度を巨大な耐えられない緊張の下に置いた。一八九九年、比例代表制に譲歩することによって、カトリック政権は国家の統一、三政党の全国的な性格、分化された多元主義的制度を保持した。その時以降、公共生活のあらゆるレベルのあらゆる局面で、三つの「伝統的政党」とすべての認知された諸利益の比例代表がルールとなった。フランデレンの言語利益はまだ伝統的利益の中に入っていなかった (Huyse, 1981, 119-120. Lorwin, 394-395, 1972.)。宗教と階級のクリーヴィジはまた利益団体のシステムにも浸透した。利益団体システムは分断化された多元主義 (あるいは垂直の区分、あるいは柱状化 *vezuiling*) の原則で形作られている。柱状化は宗教対立を完全に反映している。階級はある部分代表されて、ある部分は柱状化システムに吸収されている。利益団体における

最初の分断は、カトリック・ブロックと非カトリック・ブロックにあった。第二は非カトリック部分における社会主義のブロックと保守ないし自由主義ブロックの分断であった。それぞれのブロックは国内の利益団体構造に具合よく位置している。それぞれのブロックはそれ自身の政党、労働組合、文化やスポーツの協会、新聞、青年運動等々を持っている。この三つの主要な集団は「柱 pillars」あるいはこの概念を作成したオランダ語によれば *zuilen*、あるいは「三つの霊的集団 *les trios familles spirituelles*」と呼ばれしる (Huyse, 1981, 120)。

## 二 戦間期 (第二次大戦まで)

戦間期のベルギー・キリスト教民主主義を考察するにあたって、銘記すべきことは、一九一八—一九六八年の間、ベルギーの三六の内閣のうちで二七はカトリックの首相によって主宰されていたことである。ユダヤ教やプロテスタントのマイノリティ以外は、ベルギー人口の九八・九%は名目的にはカトリックだった (Conway, 1996, 188)。

また、政治社会構造的には、津田の言うように、三点指摘できる (津田、二〇〇一、三三二—三三三)。第一は、中間団体を經由する国家助成制度の発達である。十九世紀末の学校闘争以来、宗教・反宗教勢力観の妥協として採用された方式であるが、これは学校への国家補助金を、調停結果に基づいて中間団体に分担し、その用途については各団体の自立性に委ねようとする方式である。用途の詳細について国政レベルでの政治問題として規制するのではなく、中間団体の自由を認めることで紛争を極小化・非政治化する方法であった。第一次大戦後、社会保障制度が整備されると、この補助金方式は社会政策の分野においても適用された。この発達により、中間団体としての「柱」組織の役割が重要となり、「柱」の整備と結束は、加入者の利益に直結する意味を持つことになった。これは他方で、強力な

「柱」への参加の動機を拡大し、自立的組織の存在意義を弱めるものであった。

第二は、戦後の普通選挙の実施と労働運動の発展を背景に、労働者の組織化と政治的発言力の強化は、労使調停委員会の活動、労働党の政権参加の形で制度的に保障されていく。カトリック政党内での民主派の勢力が次第に強まり、一九二五年には民主派と社会主義者を中心とするプーレ Poulet 政権が成立するにいたった。

第三に、第一次大戦後、オランダ語系の政治意識が高まり、言語の違いによる社会的不平等に対する不満と改革の要求が強まった。この動きは新たな政治組織の形成を促し、既成の政治勢力の内部にも新たな亀裂を生むことになった。カトリック、社会主義、自由主義各勢力は社会集団の利益の統合のほかに、言語利益に基づく要請に、統一性を維持しつづいかに対応するかの課題に直面せざるをえなくなった。

一九一九年の選挙でカトリックは三七・〇二%の得票率（自由主義者は一七・六四%、社会主義者は二六・六七%）を獲得するが、もはや議会の過半数を享受する希望は持てなくなった。そして戦間期を通じて、カトリック党は、その歴史的な敵対勢力の一政党もしくは二政党と連合して政権を共有しなくてはならなくなった（Conway, 1996, 193）。第一次大戦後の混乱を避ける意味でのカトリック勢力の伸張の要因の一つは教会のヒエラルヒーによって行使された分別あるが効果的な役割がある。成年男子普通選挙権に反対し、フランデレン主義にも反対していた第一次大戦中にベルギー首座司教であったメルシエ Mercier 枢機卿が一九二六年亡くなり、カリスマ的ではないがより慎重なファン・ルーイ Van Roey 枢機卿に交替した。フランデレンの農民の息子で、メヘレン Mechelen の大司教にとどまりつつ、ベルギーの首座司教を一九六一年の死まで三五年間つとめたファン・ルーイ枢機卿は、一九二〇年代から六〇年代までのカトリック政治の推移を他の誰よりも決定した人物である。ファン・ルーイの態度は非常に伝統的

だった。フランデレンの出自ながらフランデレンの民族主義に不信感を持ち、近代文化の無神論的崩壊的な影響に根強い嫌悪感を持った (Conway, 1996, 194)。メルシエが若い世代のいくつかの思想に好意的であったのに比べ、後継者のファン・ルーイはかなり用心深い人物であったと言われる (Conway, 1990, 129)。

教会指導層とカトリック党指導層の関係は緊密だった。カトリック党の大臣が教育政策のような教会の利益にかかわる問題に責任を持つようにするために、ファン・ルーイは、カトリックの大義の全体的統一を保持するように党のさまざまなグループの間の争いの中に規則的に干渉を続けた。より広い政治的、社会経済的要因によってもそのような統一は強化された。一九一四年以前の時代の分極的な政治と比較すると、一九二〇年代と一九三〇年代の期間のベルギーの主要な三大政党の軋轢は相対的に解消した。それぞれ異なった政治哲学を信奉するにもかかわらず、カトリック、自由主義者、社会主義者は多数の実際的な政策問題について意見を異にしなかった。というのは、一党だけの議会多数の欠如がそれぞれの党を協同させ、継続的になしかし不活発なその時代の連合政治に向かわせたのである。分割された教育システム、青年運動、労働組合、保険協会、婦人組織、さらにはフットボールチームや年金グループまでもがすべて三つの大きな分離したカトリック、社会主義、自由主義の世界の分断を強化することに役立ち、それぞれの世界の政治的伝統に対する諸個人の忠誠は、彼らの毎日の生活のパターンによって絶えず強化された (Conway, 1996, 195)。

しかしながら、カトリック党の大部分の決定がフランス語系のエリートによることは「フランデレンの民主主義者」と呼ばれる人々たちによる挑戦を受けることになる。この緊張関係は一九三〇年代初期の世界経済不況がベルギーにも影響することによって顕著になる。一九三〇年代のカトリック党が直面した挑戦はフランデレンにより大きな権



利をという要求にフランデレンの多数の選挙民が示した支持だった。彼らの要求を認めることに不本意な政府のやり方はフランデレン人の憤慨を招き、一九二八年のアントウェルペン Antwerpen の補欠選挙において、フロント党 Frontpartij の候補者オーギュスト・ボルムス Auguste Borms は、彼は一九一四—一八年ドイツ占領下でドイツ人に協力した罪で解放後死刑の判決を受けていたにもかかわらず、議会に選出された。この結果は例外的なものであったが、しかし、一九三三年に、民族主義者はフロント党を解散し、デ・クレルク De Clercq を中心に大同団結し、新しい民族主義者の政治グループである「フランデレン民族連盟 Vlaams Nationaal Verbond (VNV)」が結成された。VNV は一九三六年国政選挙でフランデレン地域で三三・五六%の得票率で国会に十六議席を獲得した (Conway, 1996, 198)。一九三六年の選挙の結果は戦間期における政党政治に最大の危機をもたらした。三大政党はすべて支持を減らし、カトリック党にいたっては支持率が最低に落ち込んだ。それにかわって勢力を伸ばしたのはVNVとカトリック信仰による専制国家の成立をめざすレックス Rex であった (津田、一九九二、五二二)。

経済危機が長期化して政府への不信が募るなかで、一九三〇年代には既存の政治体制への批判勢力が成長した。一つはカトリック行動の雑誌『レスプリ・ヌーボー L'Esprit nouveau』の影響を受けた青年運動であり、もう一つはベルギー国家の中央集権制に不満を持つフランデレン主義勢力であった。前者はフランス語地域を中心に青年層に拡がり、後者はフランデレンで発達した。いずれも若い世代の関心を引き付け、新しい社会の建設という理想主義的運動の性格を持っていた。この傾向は現体制を支配している世代に対する若い世代の挑戦として、一九二〇年代後半から三〇年代にさまざまな局面で現れた一種の世代間闘争として捉えることができる。既存のカトリック組織の妥協と停滞に対する不満が、この傾向を加速した。VNVとRexの存在は、カトリック勢力におけるカトリック党の影響力

の衰退と権威主義勢力の拡大をもたらしたのであった(津田、一九九九、二〇七)。Rexについては後述する。

VNVは、一九三六年以降もその勢力を維持しフランデレン人の支持を獲得した。VNVの内部には、大ネーデルラント主義・権威主義体制支持の急進派と連邦主義・民主主義者の穏健派が共存していたが、フランデレンの独立と権威主義体制の確立を綱領にして、一九三六年の選挙では、中産階級と農民層から、既成の政党政治への不満を吸収することに成功した。VNVにおいては、反民主主義思想は一部にとどまり、フランデレンの自立を目標とするフランデレン民族主義の伝統を継ぎ、フランデレン人の利益の代弁者として支持を確保したのであった(津田、一九九二、五二三)。もともとフランデレンの民族主義は十九世紀に出現した時には基本的にはカトリックが指導する勢力であった。この民族主義は戦間期までにVNVのような自立的なグループを生み出すが、多数の点から言ってフランデレンの民族主義はカトリックの政治的知的世界に留まっていた(Conway, 1990, 137)。

多分、一九三〇年代のヨーロッパのカトリック政治で、もつとも重要な発展は、ポルトガルとオーストリアに確立された権威主義体制に対してカトリック勢力があたえた熱狂的な支持であろう。両国で民主主義体制の消滅は複雑な過程をたどるが、カトリック勢力は重要な役割を果たす。ポルトガルではサラザール Salazar が、一九三二年に首相になり、翌年、共和主義憲法を権威主義的な「新国家 Estado Novo」に置き換えたが、彼こそ、コインブラ Coimbra カトリック大学の若い学者であったうえ、それまで長い間カトリックの精神的、政治的運動の活動家だったのである。オーストリアでは、一九三四年五月に公布された新しい非民主的な憲法の起草者であるドルフス Dollfuss は、教皇の教説にはっきりと信頼を寄せることを公的に言明したので、ヨーロッパの他の諸国のカトリック勢力のみならず、ピウス Pius 十一世からも法外な称賛を得たのである(Conway, 1996, 24)。

ポルトガルやオーストリアのようにカトリックの優勢な国で、ピウス十一世の回勅に勇気付けられたカトリックの知識人は、ベルギーにおける近代的自由主義的価値を逆転しようとして、より英雄的で対決的なカトリシズムを擁護する。この精神的な復活の主要な発現は、一九二一年に創立さればかりなのに十年後に十万人の青年の大会をブリュッセルで開催したベルギー青年カトリック連盟 Association Catholique de la Jeunesse Belge (ACJB)の急速な成長であった (Conway, 1996, 201)。ピウス十一世はほとんどあらゆる政治的色彩の政治体制とコンコルダートを喜んで結んだが、彼の中心的な使命は彼らしく精神的なものにあると見なしていた。カトリック・アクションのグループはカトリックの諸政党の付属物として行動することを意図していたのではなかった。彼らの使命はACJBがそうであるように、カトリックの信仰を強化し深めるために精神的な領域で活動するところにあった (Conway, 1990, 123)。と同時に、モーラス Maurras、バレス Barrès、ベンヴィユ Bainville といったフランスの著作家の反民主主義的思想をベルギーに広める新しい世代のカトリックの思想家や評論家が目立つようになった (Conway, 1990, 120)。イタリアのファシストや『アクション・フランセーズ Action Française』の思想に影響されてこれらの集団は、権威と指導の原則が確固とした位階的で効率的な国家装置を作り出すために、普通選挙の廃止、議会と政党の権力削減、急進的な行政改革を唱道した (Conway, 1990, 121)。

ドイツの異教徒ナチズムの勃興と一九三四年のオーストリアのカトリックの指導者ドルフス Dollfuss の殺害はベルギーのカトリックの信仰への穏やかな回心というACJBの目標がもはや充分ではないという気分を醸成した。かわりに、『ラ・シテ・クレティエンヌ La Cité chrétienne』や『レスプリ・ヌーボー』という定期刊行物が、ザールのポルトガルやオーストリアのドルフス体制の類似した例をモデルにした、ベルギーにおけるカトリックに鼓

舞された新秩序を追及した (Conway, 1996, 201)。

ヨーロッパの多数の国と同様に、ベルギーにおいて、経済的不況と社会不安によって表現される挑戦に答えられないような政治制度を進んで擁護するような者はほとんどいなかった。国王レオポルド二世 King Leopold III を含むあらゆる政治分野からの改革計画が示された。諸計画の大部分は、より階層的でコーポラティズム的な統治体制を採用することによって、議会と政党の権力を削減して、行政と組織された利害団体の権力を増大することを提唱していた (Conway, 1990, 131)。

自由主義的議会主義とムッソリーニやヒトラーの国家専制主義の間にカトリック的な第三の道の探求は戦間期ベルギーのもっとも重要なカトリックの分派集団であるレオン・ドグレル Léon Degrelle に率いられた *Rex* の運動を成長させた。レックスはその名を、ルーヴェン・カトリック大学内にある A C J B に所有されている出版社『王・キリスト *Christus Rex*』に由来する (Conway, 1996, 201)。ドグレルは一九〇六年リュクセンブルク Luxembourg 州南部の小さな町ブイロン Bouillon に生まれた。父はビール醸造業者であり熱心なカトリック党のメンバーだった。ルーヴェン・カトリック大学の学生として A C J B に密接に加入し、同時に「キリスト教青年労働 *Jeunesse Ouvrière Chrétienne* (J O C)」を労働者階級に推し進めようとした。A C J B の偉大な組織者であるピカール枢機卿 Mgr. Picard に目をかけられて、ドグレルは運動の出版部門の統括者になり、その部門は一九三二年に自立的な出版社となり、それは *Rex* と呼ばれた (Stengers, 1965, 144-145)。

一九三〇年代初期の困難な状況の中でドグレルの単純化された教説は大きなアピールを持ち、若いカトリック活動家の *Rex* 運動はベルギーのフランス語地域に発現した (Conway, 1996, 202)。ドグレルは何時もカトリック党での

権力獲得を夢見ていたと言われる (Schepens, 1980, 507)。

ドグレルに率えられるベルギーの *Reex*、アイルランドの「青シャツ Blue Shirts」、スイスの *SKVP* の青年グループ、そしてこの時期にフランスの雑誌『エスプリ *Esprit*』に結集した知識人のいく人かは、国ごとの別々の情況の産物ではあるとは言え、新トミズム *neo-Thomist* 神学と一九三一年のピウス十一世によるかなり影響力をもたらした回勅『クワドラ・ジェシモ・アンノ *Quadragesimo Anno*』のような教皇の教説に由来するカトリック革命の戦闘的なレトリックを共有していた。彼らの共通の目標は真のカトリックの政治体制をもたらすことであつたが、その体制は、彼らの主張によれば、自由民主主義とファシズムや共産主義の全体主義という二悪の間に「第二の道 *third way*」をヨーロッパにもたらすことになつてゐた (Conway, 1996, 25. 土倉、二〇〇三、一〇六)。

大戦間のコーポラティズムは大半が反民主主義的であると見なされている。しかしながら、キリスト教労働運動の世界では、雇用者と被雇用者を含む社会のすべての分野での協力という古くからのキリスト教イデオロギーの線に沿つて、そしてとくに、回勅『クワドラ・ジェシモ・アンノ』の後は、コーポラティズムは自由資本主義によって引き起こされた社会的不公平を終わらせ、経済的民主主義を実現する基本的な道と考えられた。コーポラティズムの反民主主義的な形態との混同を区別するために、*ACV* は、一九三六年以降、「民主的産業組合 *democratische bedrijfsorganisatie*」と云うことをむしろ選んだ。そしてイタリアの国家コーポラティズムを非難した (Pasture, 1993, 701-702)。

ベルギーのカトリックの活動家たちはナチ・ドイツをほとんど称揚しなかつた。他のヨーロッパ諸国のカトリックの人たちと同じように、彼らはナチ・ドイツを異質な暴力体制だと非難した。同様に、ムッソリーニのイタリアも一

九二〇年代にはベルギーの保守派の各層から無批判の称賛を得ていたが、一九三〇年代のカトリックからは大きな評価を保持できなかった。ムッソリーニ・イタリアの物質的な業績やコーポラティズムの体制は好評だとしても、ファシスト国家は反宗教的で国家主義的だと見なされていたし、イタリアのカトリック・アクションのグループが圧迫を受けたことはきびしく非難された。それよりもベルギーの活動家たちは自分たちをカトリックの革新のヨーロッパ規模の運動の一部分を担っていると考え、その革新とは、さまざまなカトリック・アクションの運動だけでなくポルトガルのサラザールやオーストリアのドルフスの体制も包み込む、到るところのカトリックの人々が見習うような理想的な状態だと考えていた (Conway, 1990, 134)。

ゼーフ・ステルネル Zeev Sternhell のような歴史著作家は、フランスの『エスプリ』ないしそれと同様のグループは、ひとつの統一されたファシズム現象の表現だとしている。だが、多数の他の歴史家たちはカトリックの急進派と、俗人の急進右翼の運動の相違を強調しようとする (Conway, 1996, 25)。フランスの歴史学者ミシエル・ヴィノック Michel Winock によれば、『エスプリ』には数多くの曖昧さを指摘できる。(ブルジョワの) 民主主義や(第三共和制の主要な政党である急進社会党の) 議会主義に敵対する言説が存在する。体制の不安定化に寄与しえた、少なくともシンボルの世界での、敵対性も指摘できる。だが、ヴィノックに言わせれば、こうした言説にもかかわらず、エチオピア戦争やスペイン戦争を前にして、あるいはミュンヘンでの譲歩の時点で『エスプリ』がとった態度、さらにはフランスがこうした危機の時代における中心地となった外国人嫌いや反ユダヤ主義の流行に対して『エスプリ』がとった現実の態度がいかなるものであったか、を指摘することが適切だと言う (Winock, 1982, 284-285)。ヴィノック、一九九五、三四九-三五〇)。スペイン戦争は人民戦線よりもいっそう『エスプリ』を歴史の泥沼に陥らせたことは

ヴィノックも認めている (Winock, 1996, 132)。

一九三六年の総選挙で、期間中におけるドグレルのプジャーディスト的な政治エリートへの弾劾と広範囲な社会経済改革を漠然と約束する不穏で即興の選挙キャンペーンの後、彼の運動は十一・四九%の得票率と二一の議席を得た。この顕著な成功は主としてベルギーのフランス語地域のカトリック選挙民に基づくものである。フランデレンでは R e x はただの七・〇一%を獲得しただけなのに、農村的地方のフランス語地域では、ナムールで二〇・三五%、ルクセンブルクで二九・〇六%獲得した (Conway, 1996, 202)。一九三六年選挙の R e x の選挙結果についていくつかの問題点を指摘できる。R e x に投票した者の大半はカトリック出身である。実質的なカトリックは農民とブルジョワの二つの階層とほとんど重なる。ところが、R e x の成功は基本的には都市部、あるいは強く都市化された地域 (ルクセンブルク地域は例外) である。R e x を支持するブルジョワは二つに分かれる。プチ・ブルジョワ (とくに商人と職人である。R e x の議員団の主要な活動の一つは小商人の保護のための複数の法案を提出することだった) と、自由業と高級管理職のブルジョワ (弁護士、医者、判事、技術者、教授等々) だった (Etienne, 1968, 65)。

しかし、一九三七年四月のブリュッセルの補欠選挙でドグレルの敗北以降、R e x は多数の支持を失い、一九四〇年から四四年のドイツによるベルギー占領で、ナチの大義をベルギー人が熱狂的に支持する以前から、ヨーロッパの他の国でもあった独創的でもないファシスト・モデルの模倣の方に変わっていった (Conway, 1990, 145)。第二次大戦下のベルギーにおける主な戦争協力者は、フランデレンのナシヨナリスト V N V とドグレルの R e x だった (Conway, 1996, 205)。ドイツ軍の戦力が低下するに及んで V N V は次第に戦争協力を低下させてゆくが、R e x はナチの大義に忠実だった。ドグレルはヒムラーの S S との同盟を捏造し、大戦後期の数年間は以前のカトリックの精

神革命の擁護者はナチ宣伝機関の魅力のない英雄になってしまった (Conway, 1996, 205)。対独協力は R e x の多数の追隨者の生活を破壊しただけでなく彼らの運動を逃れようもない政治的忘却の場に引き渡してしまったのであった (Conway, 1993, 289)。

V N V と R e x の変遷は目覚しいが、カトリック世論の多数から見れば逸脱例である。ドイツ当局の抑圧的な政策は反民主主義思想への不信となり、戦争が進むにつれて、カトリックの政治姿勢が、一九三〇年代の権威主義的な思考から新たなより民主主義的な政治的秩序的ビジョンに変わってゆく (Conway, 1996, 205-6)。

カトリック再生のこれらの急進的な運動に共通していることは、自由主義の制度と原則に対する敵意であった。ヨーロッパ到るところのカトリックの急進派は、共通善の優勢とカトリック信仰の価値を確保するような新しい政治的、社会的、経済的秩序を提唱することによって、議会主義体制の無力と腐敗を糾弾した。彼らの現状維持に対する批判と彼らの提起する救済策の両方がこれらのカトリック急進派をファシズムの用語に近づけて行った。とはいえ、ファシズムが、その形態の大部分において、ナシヨナリスティックで、俗人的で、国家指向で、親工業的で、攻撃的な近代指向であるのに比べ、カトリックの急進派は、受け継がれた、統一されたコーポラティズムの共同体のぼんやりとした懐古的なビジョンに執着することに留まっていた (Conway, 1990, 150)。ミッシェル・ヴィノックが異なった文脈で明言しているように、一九三〇年代のヨーロッパは自由主義的議会秩序に対する批判に満ちていた。その批判は広範囲のさまざまな政治的伝統を表現していた。カトリシズムは疑いもなくこれらの伝統の一つであった。それはファシズムといく分かの類似性を持ちながらも独自の遺産、指導者、野心、運動を保持していた (Conway, 1990, 150. Winock, 1982, 280. ヴィノック、一九九五、三四五)。



### 三 第二次大戦後

第二次大戦後、選挙政治のバランスが、カトリック勢力に持続した政治権力を行使することを可能にさせたベルギー、オランダ、ないしイタリアのような国々では、カトリックが単一政党のもとに統一し、議会主義政治体制に一体化する明らかな誘因があった (Conway, 1996, 7)。一九三〇年代の困難な状況の中では、多数のカトリック勢力は権威主義政治体制、コーポラティズム的社会秩序といったヴィジョンに賛同していたが、一九四五年以降の年代では、民主主義体制、新資本主義的社会市場主義経済の用心深い受け入れが見られ、そのことがカトリック政治を性格づけた (Conway, 1996, 8)。政治的カトリシズムにかかる第二次大戦のインパクトはかなり複雑だった。色々な観点から、そのインパクトはカトリック政治の中心を左翼のほうに動かさせた効果があった。一九三〇年代にはっきりしていた権威主義的な夢は、フランコとサラザールの独裁は一九七〇年代まで残存していたが、戦時の諸事件によって信用を落としていた。ほとんどすべてのカトリックの人たちは民主的な政治構造を受け入れた (Conway, 1999, 94)。

第二次大戦後、キリスト教人民党 *Christelijke Volkspartij* (CVP) は創立された。当初からこの党は二つの翼を持っていた。フランデレンとワロニーであるが、最初の二十年以上は統一的構造を維持していた。一九六八年、ルーヴェン・カトリック大学の分離問題で言語の線に沿ってこの党は分裂した。社会主義者と自由主義者も一九七〇年に分裂した (Lecardie & Naple, 1994, 52)。ルーヴェン・カトリック大学の分離問題については後述する。

一九四五年新発足のCVPはカトリック教会とカトリック政党の間に存在していた伝統的な連携を終わらせることに熱心なように見えた。しかし、戦後においてもカトリック教会はCVPに対して公的な支持をした。もっとも有名

なのはファン・ルーイ枢機卿で、彼は一九四四年のベルギー民主主義連盟 Union Démocratique Belge (UDB) 創立を試みる労働派をあらさまに非難した(Lecardie & Naple, 1994, 53-54. Dewachter, 1987, 357)。さらに言えば、王位問題でも学校問題でもCVPと教会は何時も同じ側にいた。よく言われるのは、ヴァチカン第二公会議までは真の変化は起こらなかったということである(Lecardie & Naple, 1994, 54. Dewachter, 1987, 344-346)。カトリック教会とフランデレンやワロニーのキリスト教民主主義政党のつながりは非公式であっても多数存在していたということ。データとして提出できなくても想定してよいと思われる。これは、CVPとカトリック社会組織の間のつながりに ついても同じことが言える。たしかに、一九四五年、CVPは「支持団体 standen」を通しての間接的な党員よりも個人加入の党員を基盤として組織された。しかし、そのことは「支持団体」を廃止することではなかった。これらの中で保守的なカトリック統一クラブ連合 Verbond der Katholieke Verenigingen en Kringen は現実に消失したが、カトリック労組であるACW、全国キリスト教中産階級協会 National Christelijk Middenstands-verbond (NCMV)、農民連盟 Boerenbond (BB) はあらゆるレベルで影響力を増大させた。国会議員レベルを例にとると、上記のいかなる組織からも後援を受けないCVP議員、いわゆる「家なき子 sans familles」の割合は一九四六―八一年の間に三六%から七%に減少した。この同じ期間に、BB (農民連盟) に関係したCVP議員は、農業セクターの没落にもかかわらず、彼らの議席の配分を確保した。すなわち、一九四六年には二一%に対して一九八一年には十八%だった。NCMV (中産階級協会) に関係した議員は議席配分をわずかながら上昇させている。そして、ACW (カトリック労組) は一九四六年の三二%から一九八一年の五〇%に議席配分を増加させている。閣僚レベルでは一九五八年から一九八五年の間に入閣したCVP一六八人の閣僚のうち四一・二%がACWに関係していた。十六・四%がNCWV、

十四%がBB、他方、驚くべきことに二八・六%が「家なき子」だった (Lecardie & Naple, 1994, 54. Dewachter, 1987, 340)。UDBについては後述する。

ファン・ルーイは第二次大戦後の自由主義、社会主義、共産主義の世俗連合がカトリック教会を攻撃することを恐れ、カトリックの政治結集が緊急の優先事項とみなした。ロンドンからピールロット Pieterot をはじめとするカトリック政治家が帰国するのを支援しながら、大部分が若い世代の政治家たちによる、先行者たちのゲットー的心理を拒絶してカトリックの価値と利益をはっきりと表明する発言者として振舞うような、新しいカトリック政党設立の努力を奨励した。その結果、CVPが誕生した (Conway, 1996, 207)。

一九四四年九月のベルギー解放後、ともにレジスタンスを戦った若い社会主義者とカトリックたちのグループはとくに以前のキリスト教民主主義労働組合メンバーを含めた労働党を形成することによって政治構造を再編することを提案したが、このようなプランはドイツにもあったし、オランダの「突破 doorbraak」もこれに似ていた。しかし、オランダの経験で明らかのように、旧構造を回復しようとする衝動は強力だった。

ここで、以下の行論にも関係するオランダの「突破 doorbraak」について、水島治郎に教えられつつ要約しておく。オランダでも戦間期に戦後改革を志向する革新派 vernieuwers と呼ばれる人たちがいた。彼らが共通に目指していたのは、戦間期までの硬直した政治体制を「突破」し、柱状化社会に風穴をあけることだった。宗派や世界観による分裂を抱え込んでいるオランダの政治を改革するためには、中道に位置していた宗派政党を解体して（「突破」）、それぞれ保守 conservatief と進歩 progressief の理念を持つ政党を軸とした政党制を作る必要がある。革新派は「進歩」軸を担う政党を目指していた。これら革新派の中には二つの異なる流れが存在していた。その一つは旧社

会民主労働者党出身の人々からなる流れである。第二の流れは新たな政治勢力の結集の基本理念の一つとしてキリスト教を念頭におくが、かつての宗派政党のあり方とはまったく異なっているもの、すなわち教会の利益保持のために行動することはないものであった(水島、二〇〇一、八四―八五)。

一九四五年五月、オランダ全土が解放されるとさっそく革新派はオランダ人民運動 *Nederlandse Volksbeweging* の設立を発表し、スヘルメルホルン *Schermerhorn* を議長に選出した。一九四五年六月、戦後最初の内閣が成立し、新首相にはオランダ人民運動議長スヘルメルホルンが選ばれた。スヘルメルホルン内閣は、戦後再建に直ちに取組みむとともに、戦前との断絶を強調し、社会民主労働者党やオランダ人民運動の主張に近い目標を掲げた(水島、二〇〇一、八六―八七)。

他方、オランダの旧ローマ・カトリック国家党では、戦後直後に多くの有力メンバーが人民運動に参加し、情勢は流動的だった。しかし司教団を中心とする教会側は旧来のカトリック系組織の再建を強く求め、これを受けたフランシスコ会修道士のストックマンらがカトリック政党の再建に向けて実務的な活動を開始した。一九四五年十二月、表向きは非カトリック信徒にも開かれているもの、ローマ・カトリック国家党と同様カトリック性を前面に掲げるカトリック人民党 (*KVP*) が、カトリック系の主要政治指導者をほぼ糾合する形で成立する。オランダ人民運動が目指していた「突破」は困難になった(水島、二〇〇一、八七―八八)。

さて、ベルギーのファン・ルーイ枢機卿は戦時における愛国的行動によって名声が高かったが、以前と同じように、すべてのカトリックに向けたひとつの政党が良いことを強力に発言した。そして大多数の古くからの社会主義者たちは君主制問題で強化された強い反教権主義感情を持っていた (Evans, 1999, 246)。ヨーロッパにおいて、十九世紀か

ら産業労働者階級の間では宗教的実践は下降し、社会主義政党への支持が上昇していたにもかかわらず、強力なカトリック労働者階級の伝統は残存していた。とくに、ルール Ruhr、バスク Basque 地方、フランスとベルギーのいくつかの産業地域では、カトリックの労働者が大きな自立した勢力を形成していた (Conway, 1996, 9)。一九四九年の選挙で P S C / C V P は増加し、社会党は微減だったが、最大の変化は共産党の四十%以上の支持率の低下だった。これは言うまでもなく、婦人票効果より東ヨーロッパの事件の反動によるものだった (Evans, 1999, 247)。

ファン・ルーイや同僚司教の精力的な努力により、この党は四二・六六%という驚異的な記録で勝利した。第一次大戦後以降で、いかなるカトリック政治勢力もこの高率を達成できなかった。C V P の成功は対抗的なカトリック政治団体であるベルギー民主主義連盟 Union Démocratique Belge (U D B) からの挑戦にもかかわらず達成されただけに印象的だった (Conway, 1996, 207)。

U D B は、戦後ベルギーにおける重要な対抗的なカトリック政治団体であるので、簡単に素描しておきたい。U D B は戦後のベルギーに風穴をあける décloisonnement 運動の一つであった。この新しい政治運動は、とくにフランスの M R P の影響を受けた数人のキリスト教民主主義者 (アントワヌ・デルフォス Antoine Delfosse、マルセル・グレゴワール Marcel Grégoire、ジャック・バジン Jacques Basyne) によって、戦前の社会党とカトリック党に代わる労働者の党として、一九四四年の九月に創設された。最初の構想では、カトリックと社会主義者の古くからの反目を克服するために呼びかけるといったものだった。イギリス・モデルの影響は明らかである。実際、U D B の有力メンバー (ヴェリアム・ウジュウ William Ugeux、ポール・レヴィ Paul Levy) は戦時中ロンドンに滞在していた。だが、U D B の根はもつと深い。この運動はフランデレンにも控えめに活動を広げたことは事実である (バジンはブリュ

ジュ人 *Brugers* であった) が、基本的にはワロニーの不满を表現したものであった。この運動は、戦前のカトリック政党の破産に対する、フランデレンよりもワロニーに顕著に現れた、進歩的なキリスト教民主主義者の失望に最初の原因を求めることができる。「団体 *standen*」としてのカトリック党の存命を確保するという大義のための絶えざる妥協は、労働者翼固有の原則をあまりにも抵当に入れすぎた、という不満だった。広く根を下ろした単一の労働者政党のおかげで、人は戦間期に表れ、ファシスト勢力の登場に責任あると考えられる政治的不安定に終止符を打つことも希望した。結局、UDBの創設は、その起源を大部分戦時中のレジスタンスにおけるカトリックと他の哲学から来た人たちの共通の経験の中での「三人の創設者」(バジン、グレゴワール、デルフォス)の開始に見出すことができる。それこそがUDBが「レジスタンスの党」として登場した理由である。UDBはワロニーのキリスト教労働組合のミリュールでは非常な人気があった。この新党は、一九四五年八月、ファン・アッケル *Van Acker* 内閣に、増大する政治の分極化で辞任したカトリック党に代わって入閣した (*Pasture, 1994, 254-256*)。だが、最終的には、王位問題において、ファン・ルーイがカトリックに団結を呼びかけたことによって、UDBは分断され衰退していった (*Beerten, 1990, 254-256*)。UDBの呼びかけにカトリック労働者の指導者たちが最初から欠如していたことも事実である。二、三人の例外的なカトリック労働者の指導者を別にすれば、UDBの人たちはカトリック労働者階級の組織構造の外にいた中間層や知識人グループが大勢を占めていた (*Conway, 2001, 272*)。UDBの消滅は戦後ベルギーの政治的光景の中でイモビリスムを象徴していた。カトリック、社会主義者、自由主義者は支配的な政治勢力にとどまり選挙民の大多数からの支持を享受し続けた (*Conway, 1996, 208*)。

第二次大戦後のPSC/CVPのもっとも重要な変化はそのイデオロギーにあった。たんにカトリック教会と信者

たちの利益の擁護者としてだけでなく、自由主義資本主義とマルクス主義全体主義の間の「第三の道」をもたらす新しい形の社会に、新しい党はコミットした (Conway, 1996, 209)。この党のイデオロギーのキーワードは「人間主義 Personalism」だった。大戦後のフランスのMRPと同じく、PSC/CVPは多くのアイデアを、全体主義国家と自由主義社会のアノミーからの解放を求めるジャック・マリタンやエマヌエル・ムーニエの著作から引き出した。PSC/CVPはたしかにカトリック的価値に鼓吹されていたが、党は宗教政党ではないことを熱心に主張した。党の名前に「カトリック」からより懐柔的な「キリスト」という語に変えられたのはこの変化の徴である。党の指導者たちはPSC/CVPは党の政治的・社会的・経済的綱領を支持するすべてのベルギー人に党は開かれていると主張した。この綱領は真の新しい出発だった。一九三〇年代における権威主義的モデルへのカトリックの心酔とは対照的に、PSC/CVPは、国民利益の至高性を確保することを可能にする強力な行政によって増強されているが、より開かれた民主主義的な議会主義体制に加担することを強調した。しかしながら、PSC/CVPの創設者たちのこの大胆な野心は当時の政治状況の現実によって矛盾を来たした。一九四七年、PSC/CVPは社会主義者と連合政権を形成したが、彼らの改革綱領のほとんどの部分が実施されなかった。経済復興の優先と冷戦下の西ヨーロッパの同盟へのベルギーの外交的イデオロギー的統合は、党は伝統的なカトリックの利益を擁護すべきであるというファン・ルーイ枢機卿からの圧力にもかかわらず、政治的・経済的改革という考え方に不都合となった。ヨーロッパの他の場所でもカトリック政党は同じような圧力を受けた。しかし、ベルギーにおいて、PSC/CVPが本来の非宗教政党として出現しようとする努力を何よりも害したのは国王レオポルド三世にかかわる論争だった (Conway, 1996, 209)。

王への支持はPSC/CVPの選挙における優位をもたらした。一九四八年、婦人参政権は認められていたが、一

九四九年の補欠選挙において、女性票とレオポルド問題に対する党の基本的支持の姿勢は四三・五六%の支持を得て議会の過半数に達することが出来た。フランデレンのカトリックであるガストン・エイスケンス Gaston Eyskens 首相に率いられたあらたなカトリック自由主義連立内閣は、王の将来について、強引に国民投票を実行することにした。一九五〇年三月十二日に実施された国民投票は王位問題を解決するどころか、この国の分裂の深さを示す結果になっただけであった。親レオポルドの主張は国民の五七・六八%という辛うじて過半数だったのみならず、フランデレンが七二%支持に対し、ワロニーは四二%を獲得したにすぎなかった (Conway, 1996, 210-211)。

一九五〇年の選挙は、ある程度王位問題をめぐって戦われ、国民投票の結果を反映していたが、社会党、共産党、自由党の合計一〇四議席に対して、PSC/CVPが二二二議席中一〇八議席の過半数を得た (Evans, 1999, 248)。

より重要なことは、カトリック系学校の一致した擁護はカトリック政治共同体を突き崩す要因を無限に延長させたりはしなかった。この要因は古いものと新しいものの結合であった。その中で大きなものは、PSC/CVPとカトリックの労働組合、他の労働組織との関係の、未解決の問題であった。第二次大戦後のPSC/CVPの新組織はACWから多数の党役職者を調達していた。しかしながら、とくにフランデレンではACWはカトリック政治の主要勢力であった。ACWは重要な財政支援者であり党の選挙立候補者の選出には大きな影響力を持っていた。その力はカトリック労働組合組織の急速な拡大によって強化された。カトリック労働組合ACW/CSCは一九四五年三二二・〇九九から一九五九年七三二・二八一に増大し、社会党系労組 *Fédération générale du Travail de Belgique* (FGTB) を凌駕した (Conway, 1996, 213)。

一九五八年の学校協定は学校戦争に永遠の決着をつけた。要するに、それはカトリック系の学校と公立の学校があ



らゆる意味で同等の地位であり、「家族の長」が学校の選択ができる権利を宣言した。自由主義者側への唯一の譲歩は、国家は如何なる時でも新学校設立の財政援助を行なうが、カトリックの新学校については、認可はするが資金は出さなごう点だった (Evans, 1999, 249)。

一九六一年八月、ファン・ルーイは八七歳で死去した。彼の後継者であるスエネンス枢機卿 Cardinal Suenens は第二ヴァチカン会議で際立った役割を果たしたが、信仰において、政治的にも精神的にも一様な画一性を課すことを求めたりはしなかった。新たな教会あての精神的な指導は発せられなかったので、聖職者は信者がどのように投票するかという助言などしなかった。フランデレンにおける社会経済変化の急速な速度によって加速されて教会への出席は顕著に下降した。一九六八年以降、宗教的実践のレベルは年に平均一・九%ずつ低下し、一九八一年までに人口の二六%のみがミサに参列するだけだった (Conway, 1996, 213)。

地域主義感情の昂揚もまた P S C / C V P のフランデレン翼の支持を腐食した。一九六〇年代初期のオランダ語とフランス語地域の言語の境界とフランデレン内にあるブリュッセルの大部分がフランス語都市の地位をめぐる論争は、ベルギー国家の中でフランデレン人は貶められた身分であると認識している長期にわたるフランデレンの人たちの不平を増加させた。C V P はフランデレンの人たちの不満の代弁者になるようになり努力した。しかし、多数のフランデレンの若い活動家の急進的な雰囲気には時代遅れだった。彼らはブリュッセルでの一連の街頭行動を組織し、ナショナリストの「フランデレン民族同盟 Volksunie (VU)」の列を膨張させることになった。一九六八年の選挙で VU はフランデレン地域で十六・九%の得票だった。その票の大部分は C V P の損失によるもので、C V P はフランデレンで一九五八年の五六・五%から一九六八年の三九%まで下降した (Conway, 1996, 216)。

戦争時のドイツへの協力による旧VUの不評のためにフランデレンの民族主義は沈黙を守っていた。戦後のVUは一九五四年まで一議席も取れなかった。そしてCVPがフランデレン問題の代弁者として、オランダ語使用者が一九三〇年代書面上の権利は勝ち取ったがしばしば無視されていた権利を拡大する役割になうことに、満足しなければならなかった (Evans, 1999, 250)。一九六〇年代までに、フランデレンの民族感情が復活するだけでなく、ベルギー経済の全面的な復興はフランデレン問題の力学を変化させていた。遅れた貧困なフランデレン人に不承不承後進地域へ譲歩していた豊かで先進的なワロニーどころか、ワロニーはしだいに経済的下降をたどり、人口や自信が次第に低下していった。他方、フランデレンは経済ブームを享受し、人口が増加し、新しい自信に満ちた外見を取るようになった。それは、古い劣等感と結合されたものであり、「負け犬の反発」に結びつき、政治的に激烈なものだった (Evans, 1999, 250)。一九五〇年代、フランデレンとワロニーの間の経済的富の関係は根本的に変化した。資本投資と成長する新産業は北部地域で活発になり、フランデレンの増大する政治力に経済力を付加することになる。ワロニーは、一部は国際経済の変化の場面、もう一部はこれまでの指導的産業プラントが未来の成長と発展を抵当に入れていたという事実、南部地域が苦しんでいることに起因する人口的低落と経済的停滞を経験することになる。換言すれば、小規模のワロニーはフランデレンが十九世紀に経験したのと同じ後進化のプロセスの犠牲となった (Huyse, 1981, 113)。

ブリュッセルは十九世紀の初頭以来フランス語が話される都市であった。そして同じくそれ以来国際都市であった。国際的に知られた言語のほう都市の活動にとっては今まで以上に重要である。しかしながら、その位置は、地理的にも歴史的にもローマ時代以来変化しない言語境界の北部にあるフランデレンのブラバント州にあった (Evans,

1939, 251)。CVPの戦闘分野として、フランデレンのカトリックの要求に応えようと努力してもフランス語地域の社会キリスト教翼が不活発不同意であることと、分離の権利を主張して「鞭打ち政党」(zweeppartij)として行動するVUからの圧力で難渋した(Evans, 1999, 251)。

ベルギーは、パラドックスに充ちた国である。異質な二地域——北半分を占めるオランダ語系のフランデレンと南のフランス語系のワロニー——で国土を二分されながら、十九世紀の独立以来強力な中央集権制を採用してきた。また、言語を始め、宗教・階級のクリーヴィッジによる社会の分節化が進みながら、ベルギーは国家として存続しただけでなく、相対的に安定した民主主義体制を維持し、高度経済成長を達成してきたのである。七〇年代初頭、ヨーロッパの小国における政治の安定が注目を集めるに至った際、ベルギー政治は「多極共存型デモクラシー(sociational democracy)」の一事例として取り上げられることになった。しかしながら、ベルギーに特徴的なのは、言語のクリーヴィッジをめぐる対立が六〇年代から強まったことである。この対立は、おりから西ヨーロッパ各地で顕著になった少数民族の中央への抵抗運動 ethnic movement の文脈で語られることになった。そして、七〇年代後半以降、連邦制国家への以降が始まるにつれ、エスニシティ問題への関心が、それまでの列柱状社会分割に基づく政治システムの分析にとって変わるようになる(津田、一九九一、一一四)。イモビリスムで要約できる、言語・地域問題の展開は、宗教・階級の二つのクリーヴィッジで形成されてきた列柱状社会分割の影響を受けてきたのである(津田、一九九一、一二二)。

とくに情熱的で象徴的な闘争が、一四二六年に設立され、国際的に名声のある私立のカトリック大学であるルーヴェン大学をめぐって起きた。十九世紀末において、ベルギーの四大学、ヘントとリエージュの国立大学とルーヴェ

ン大学、そして俗人で自由派が支援するブリュッセル自由大学の教育は、フランス語で行なわれていた。第一次大戦後、多数のオランダ語のコースが導入された。そして一九三〇年までにヘント大学は完全なオランダ語のカリキュラムになった。フランデレンのブラバント州にあるルーヴェン大学も、これと競争して、フランス語コースとオランダ語コースを提供するようになった (Evans, 1999, 252)。

一九六〇年代のルーヴェン大学はフランデレン半数、フランス語系半数の二万二千人の学生を擁する大学だった。「言語ジャコバン主義」と呼ばれる暴動において暴徒たちは、大学名を町の名前と同じフランデレン語の名称のルーヴェン Leuven にするだけでなく、フランス語系のカリキュラム、学部、図書館、学生機関を廃止することを要求してキャンパスを取り囲んだ。事実上「ワロニーは出て行け！」と要求したわけである。司教たちは、教会の階層が下級の聖職者は別にして、度々親フランス語系であるというフランデレンの人たちの長い間の疑いは認めつつも、古くからの大学を今まで通りにしようとして干渉した。一九六八年の解決は、古くからの建物はルーヴェン大学となり、オランダ語系のコースを伴ったフランデレンの独占的な制度となった。他方、フランス語系の学部、大学行政機関、学生機関は一斉に en masse 数マイル離れた言語境界の南に位置するオッティグニ Otignies の街のルーヴェン・ラ・ヌーヴ Leuven-la-neuve 大学と呼ばれる新しい建物に移動した (Evans, 1999, 252)。カトリック教徒は信仰問題では司教に敬意を表したが、大学教育問題ではそうではなかった (フェルーフフェン、一九九〇、一七四)。強力な草の根の反対運動のゆえに、フランデレンのカトリックの指導者はフランデレンの世論を抑えることが出来なかった。そのことが、カトリック党の分裂を導いた。分裂した二つの党とは、フランデレンの CVP とフランス語系の PSC である (Dewachter, 1987, 297)。

ルーヴェン大学の呼称をめぐるすべての論争はカトリック共同体における言語分割の問題を象徴していた。ベルギーのカトリック世界の歴史的な中心制であるこの大学は一九六〇年代にフランス語系とオランダ語系の学生たちの間の闘争によって大きく麻痺させられた。それは政党の分裂を招いた。一九六八年の三月の補欠選挙でPSCとCVPは初めて別の政党綱領を提示した。一九七二年までは共通の全国委員長を維持したが、彼らは急速に、そして現在もそれが続いているが、独立した政策を持つ別々の地域政党になった。ルーヴェン大学問題という象徴的だが高度に感情的な争点で引き起こされた、統一していたカトリック党の内部の離婚は、ベルギーにおける政治的カトリシズムのある形の終焉であった (Conway, 1996, 216; Fitzmaurice, 1996, 173-174)。フランデレンの指導的な論説委員は当時のエイスケンス内閣を評して「新しいベルギーの最初の内閣であるか、古いベルギーの最後の内閣である」と評した (Lorwin, 1972, 412)。

ベルギーにおけるカトリック的統一を掘り崩したのは地域間の緊張だけではない。一つには、一九六一年、自由党が自由と進歩の党として再出発し、はっきりと反教権主義的遺産を拒絶して中間層のカトリック票を開拓しようとした。社会党も、一九六九年、教権・反教権の分割の終了を宣言した。もう一つはワロニー連合 *Rassemblement Walon* とVUの成長はPSCとCVPの選挙基盤の腐食に貢献した。一九五八年の統一PSC/CVPは四六・五%の得票率であったが、一九七一年までに分離したPSCとCVPの得票率を合計しても三〇%にすぎなかった (Conway, 1996, 217)。ベルギーの政治学者ドワフターによれば、一九六一年の自由党の古い急進主義の放棄を伴ったカトリックへの門戸解放は一九六五年のカトリック党の低落をいくぶんか説明するし、カトリックの柱 *pill* の弱化にもつながる、と言う。宗教的な実践の衰退と並んで、一九六〇年代の初頭から司教の政治への干渉が広範囲にな

くなった。第二ヴァチカン会議は教会を脱教権化し、カトリックの平信徒を解放した。開かれた態度は教会に浸透した。「改心convert」への熱心さは寛容に取って代わった (Dewachter, 1987, 344)。

言語の分割は、教権／世俗の分割線と同義ではない。また、フランデレンが、オーストリアのキリスト教社会党が一九三〇年代に造ろうとしたカトリック・ユートピアに似ているわけではない。しかし、ベルギーの分割社会は、善かれ悪しかれ、フランデレンのカトリックが経済的・教育的・政治的近代において、高度な社会統合を達成していなかったら考えられないことだろう。オランダやスイスと同じく、ベルギーにおいて、カトリックは国を動かすと言われていたのである (Evans, 1999, 252)。

いかなる政党もそのような圧力のもとで統一を維持することは難しかった。もともと単一言語の政党を除けば全ての政党が分離した。そしてカトリック政党が一番早く分裂した。フランデレンのCVPは一九六八年にフランス語地域の社会キリスト党PSCと分裂した。十年後に自由党と社会党が言語境界にしたがって二政党から四政党になった。一九四六年にはベルギー政治界ではただの四政党しか存在しなかったのに、一九八一年には十二になった (Evans, 1999, 251-252)。

オランダの政治学者、ルカルディーとネーブルによれば、一九七〇年の時点で、九二・七%のCVP選挙民が実践的なカトリックであると自認している。一九九二年の別の調査によれば、四四%のCVP選挙民と四六%のPSC選挙民が毎週教会に行き、これはベルギー人全体の二二%と対照的であるとしている。その調査によれば、十六%のCVPと十二%のPSC選挙民が教会に全然行かない。ベルギー人全体では二九%であるとされる。やはり、ルカルディーとネーブルによれば、党員の宗教と教会実践にかかわる利用できるデータはないにもかかわらず、CVPとP

SCは彼らの先行者と同様に教会に出席するカトリックが優越する政党であると結論するのが適當であるとしている (Lecardie & Naple, 1994, 57)。

一九八三年には、たった二三・六%のカトリック教徒がCVP/PSCに投票しただけだった。これに対する説明として、共同体(地域民族的) 政党の前進がある。とくにフランデレンのVUは多数の実践的カトリックを惹きつけたと言われる。また、社会党や自由党もカトリックに対して開放的になってきたことや、一八八四年のEC議会選挙を例にとると、環境保護派が大きな選挙的な脅威となった。また自由党の近年の市民党への転換の効果は定かではないが世論調査では投票行動に大きな影響をあたえたことを示唆している (Lecardie & Naple, 1994, 59)。

CVPはどのようにイデオロギー的に位置づけられるか? 一九四五五年の有名なクリスマス綱領は、あらたに結成されたCVPは、西側の文明と文化を代表する人間的価値に基づくキリスト教政党であると宣言した。しかし、一九八六年の党文書では排他的にキリスト教的ではないとしている。社会的人格主義は別として、党の基礎的な概念は団結、責任、保護である (Lecardie & Naple, 1994, 59)。と同時に、西ヨーロッパにおける政党システムにおける配置の問題として、キリスト教民主主義政党は中間派の政党にならざるをえないという問題がある。ベルギーやオランダではキリスト教民主主義政党は明らかに社会党と自由党との中間にその位置を占め、内閣はキリスト教民主主義政党を軸として、社会党との中道左派内閣か、自由党との中道右派内閣かということになる。この結果、宗教が大きな政治問題でなくなるとキリスト教民主主義政党が弱くなり、他方で自由党の力が強くなり、政党システム自体が変化してきた (西川、一九八八、四七―四八)。

以前のCVP先行者の構成要素の一つは自由民主主義が教会の社会における地位にとって脅威であると見なすこと

にあった。だが、CVPはいまや近代的代表制大衆民主主義を受け入れたように見える。ベルギーのキリスト教民主主義は、一、二、三の限られた問題を除けば、近代化の主要な観点は受け入れたように思われる (Lecardie & Naple, 1994, 63)。

第二次大戦後ほとんどの期間にわたってキリスト教民主主義政党は、得票率が一九五〇年四八%から一九九一年二四・五%というように、もっとも強力な政党だった。フランデレンでは、CVPは常に支配政党だった。ワロニーでは、社会党や自由党の後塵を拝して第二党か第三党にしかたななかった。一九四五—四七年、一九五四—五八年を除いて、CVPは何時も与党だった。そのうえ、戦後ベルギーのほとんどすべての首相はフランデレンのキリスト教民主主義者だった (Lecardie & Naple, 1994, 65)。だが、一九六〇年代以降になって、フランデレンの急速な経済的近代化とその結果としての社会的文化的変化は顕著な宗教的実践の低下を惹き起した (Conway, 1996, 189)。

ベルギーの政権は長い間 (ウイルフリート・マルテンス Wilfried Martens やガストン・エイスケンスのような) 同じ指導者を首相としてきたが、頻繁に辞任がなされ、政権の危機が訪れるようになった。八七年と八八年には、半年と持ちこたえたベルギーの政権は一つも存在しない (Laqueur, 1992, 463. ラカー、一一〇〇〇、七三)。政党システムは、六〇年代末に相次ぐ既成政党の分裂により、質・量ともに変化した。六八年に再燃した、ルーヴェン・カトリック大学移転問題は一大社会問題となり、これへの対応の相違から、選挙期間中に、キリスト教政党が二分され、選挙後、その敗北が原因でブリュッセルの位置づけをめぐる内部対立の状態にあった自由進歩党が、フランデレンのP.V.V、ワロニーのP.R.L、ブリュッセルのP.Lに分裂した。社会党は七八年まで形式上の統一を維持したが、六〇年代末よりワロニー経済再興を目的とする地域内社会主義の実現の関心が高まり、フランデレン派との利害の相違が



顕在化していた。(津田、一九九一、一三〇・一三二)。

元来、多極共存型デモクラシー論が想定していたのは、分節化された社会におけるエリート協調による政治の安定化であった。七〇年代のベルギー社会は、世俗化と福祉国家化により、かつてのイデオロギーによる結束を弱めた。それに加え、党内利害の多様化は、区画内でのエリートへの委任とエリート間協調の成立を困難なものにした。しかし、他方で、ベルギー政治社会は、列柱状社会の解体——脱柱状化 *ontzuling*——に向かわず、党エリート主導で利害調整が進められたことは否定できない。七八年十二月に始まる政治危機——九九日間の政権形成交渉——においては、ベルギー政治社会がその外観を維持しつつ言語・地域間利益の表出に対応し変化していることが指摘できる。そしてその展開は、言語・地域利益と従来のサブカルチャー利益の二つのベクトルの合成として捉え得るのである。(津田、一九九一、一三八)。他方、レイプハルト Lijphart は言語・地域利益の表出について次の二点を指摘する。第一に、一九六〇年代の民主化の新しい波は、分権化、自治、地域化のような政治的要求に新しい命を吹き込んだ。そして伝統的な共同体の強化につながった。第二は、生活の質や小規模の活動に強調点をおくポスト・ブルジョワ的価値の増大である (Huyse, 1981, 113)。

ベルギーの国家制度——君主制、軍隊、議会——はまだ存在しているが、人々の忠誠度の維持はもはや自明のことではなくなってきた。ベルギーの政治指導者は新たな連邦的政治システムへの複雑な過程を開始している (Conway, 1996, 190)。「とイギリスのベルギー政治史研究家は約十年前に書いたが、「ベルギーは共同体と地域から構成される連邦国家である」(Craenen & Dewchter, 2001, 7)とベルギー憲法第一条に書かれているように、ベルギーは確固とした連邦国家の道を歩んでいると思われる。だが、政党システムに目を転じるならば、今まで少数政党であった自由

主義政党がキリスト教民主主義政党に変わって主要政党になりつつあり、キリスト教民主主義政党の右の部分は自由主義政党、左の部分は環境保護政党に侵食されているという構図になっている (Beke, 2004, 134-135) が、一九九〇年以降については別の機会に詳細に論じたい。

引用文献

- Beerten, Wilfried (trad par Maurice Galderoux). 1990. *Le rêve travailliste en Belgique*, Editions Vie Ouvrière.
- Beke, Wouter. 2004. "Living Apart Together Christian Democracy in Belgium" in ed. by Steven Van Hecke & Emmanuel Gerard, *Christian Democratic Parties in Europe since the End of the Cold War*, Leuven University Press, pp. 133-158.
- Conway, Martin. 2001. "Left Catholicism in Europe in the 1940s. Elements of an Interpretation", in ed by Gerd-Rainer & Emmanuel Gerard, *Left Catholicism 1943-1955*, Leuven University Press, pp. 269-281.
- Conway, Martin. 1997. *Catholic Politics in Europe 1918-1945*, Routledge.
- Conway, Martin. 1996. "Belgium", in ed by Tom Buchanan and Martin Conway, *Political Catholicism in Europe 1918-1965*, Clarendon Press, pp. 187-218.
- Conway, Martin. 1993. *Collaboration in Belgium: Léon Degrelle and the Rexist Movement 1940-1944*, Yale University Press.
- Conway, Martin. 1990. "'Building the Christian Community': Catholics and Politics in Interwar Francophone Belgium." *Past and Present*, 128, pp. 117-151.
- Craenen, G. & Dewachter, W. 2001. *De Belgische Grondwet Nederlandse en Franse teksten*, Acco.
- Dewachter, Wilfried. 1987. "Change in a Particratic: The Belgian Party System from 1944 to 1986", in ed. by Hans Daalder, *Party Systems in Denmark, Austria, Switzerland, The Netherlands and Belgium*, Frances Pinter, pp. 285-363.
- Dumont. Geoges-Henri, *La Belgique hier et aujourd'hui*, 2<sup>e</sup> éd., P. U. F., 1993.
- Étienne, Jean-Michel. 1968. *Le mouvement rexiste jusqu' en 1940*, Presses de la fondation nationale des sciences politiques.
- Evans, Ellen L. 1999. *The Cross and the Ballot: Catholic Political Parties in Germany, Switzerland, Austria, Belgium and the*

- Netherlands, 1785-1985*, Humanities Press.
- Fitzmaurice, John. 1996. *The Politics of Belgium: A Unique Federalism*, Hurst.
- Huyse, Luc. 1981. "Political Conflict in Bicultural Belgium", in Arend Lijphart ed., *Conflict and Coexistence in Belgium*, Institute of International Studies, pp. 107-126.
- Kalyvas, Stathis N. 1998. "From Pulpit to Party: Party Formation and the Christian Democratic Phenomenon", *Comparative Politics*, Vol. 31, No. 3, pp. 293-312.
- Kalyvas, Stathis N. 1996. *The Rise of Christian Democracy in Europe*, Cornell University Press.
- Laqueur, Walter. 1992. *Europe in Our Time: A History 1945-1992*, Viking.
- Lamberts, E. 1999. "Belgium since 1830", in ed. by J. C. H. Blom & E. Lamberts, *History of the Low Countries*, Berghahn Books, pp. 313-384.
- Lecardie, Paul & Naple, Hans-Martien ten. 1994. "Between Confessionalism and Liberal Conservatism: The Christian Democratic Parties of Belgium and the Netherlands", in ed. by David Hanley, *Christian Democracy in Europe: A Comparative Perspective*, Pinter Publishers, pp. 51-70.
- Lorwin, Val R. 1972. "Linguistic Pluralism and Political Tensions in Modern Belgium", in ed. by Joshua A. Fishman, *Advances in the Sociology of Language*, Mouton.
- Pasture, Patrick T. 1994. "Redressement et expansion (1945-1960)", in dir. Emmanuel Gerard et Paul Wynants, *Histoire du mouvement ouvrier chrétien en Belgique, Tome 1*, Leuven Univ Press, pp. 247-301.
- Pasture, Patrick T. 1993. "The April 1944 'Social Pact' in Belgium and its Significance for the Post-War Welfare State", *Journal of Contemporary History*, Vol. 28, pp. 695-714.
- Schepens, L. 1980. "Fascists and Nationalists in Belgium, 1919-40", S. V. Larsen, B. Hagtvet and J. P. Myklebust (eds.), *Who Were the Fascists*, Universitetsforlaget, pp. 501-516.
- Stengers, J. 1965. "Belgium", in H. Rogger and E. Weber (eds.), *The European Right*, Cambridge University Press, pp. 129-167.
- Winock, Michel. 1996. *«Esprit» Des intellectuels dans la cité (1930-1950)*, Editions du Seuil.

Winoock, Michel. 1982. *Nationalisme, antisémitisme et fascisme en France*, Seuil.

Witte, Els, Craeybeckx, Jan & Meynen, Alain (Translation: Casert Raf). 2000. *Political History of Belgium from 1830 onwards*, Standard Uitgeverij/VUB University Press.

ヴィノック、ミシエル(川上勉・中谷猛監訳)、一九九五、『ナショナリズム・反ユダヤ主義・ファシズム』、藤原書店。

カリヴァス、シュタデイス・N(土倉莞爾・石橋章市朗訳)、二〇〇〇、「民主主義と宗教政治——ベルギーを事例に——」『関西大学法学論集』第四九卷第六号、八一—一一九頁。

デュモン、ジョルジュ・アンリ(村上直久訳)、一九九七、『ベルギー史』(文庫クセジュ七九〇)、白水社。

フェルーフエン、ヨセフ、一九九〇、「ベルギー…言語の地方主義——官僚化と民主化——」ハンス・ダールター、エドワード・シルズ編(藤崎千代子他訳)『大学紛争の社会学——パリ五月革命以降の欧米の大学はいかに変革されたか——』、現代書館、一五—一九五頁。

ラカー、ウォルター(加藤秀治郎他訳)、二〇〇〇、『ヨーロッパ現代史』三、芦書房。

栗原福也、一九八二、『ベネルクス現代史』、山川出版社。

津田由美子、二〇〇一、「ベルギーの柱状化に関する一考察」『姫路法学』第三一・三二合併号、二九七—三三六頁。

津田由美子、一九九九、「マンの労働プランをめぐる政治協力の可能性——一九三〇年代危機におけるベルギーのキリスト教民主主義と社会主義——」『姫路法学』第二五・二六合併号、一九九—三三二頁。

津田由美子、一九九四、「ベルギーのエスニック紛争と連邦制——一九九三年の連邦制への以降に関する一考察——」日本政治学会編『年報政治学』、岩波書店、四一—六〇頁。

津田由美子、一九九一、「ベルギーにおけるエスニシティ紛争の展開——一九七〇年代を中心に——」犬童一男ほか編『戦後デモクラシーの変容』、岩波書店、一一三—一五一頁。

津田由美子、一九九二、「戦間期ベルギーにおける言語問題の展開」『国家学会雑誌』第一〇五卷第五・六号、四九一—五三二頁。土倉莞爾、二〇〇三、「ヨーロッパキリスト教民主主義試論」『関西大学法学論集』第五三卷第一号、五六—一一六頁。

西川知一、一九八八、「キリスト教民主主義政党的成立過程」『姫路法学』創刊第一号、一一五〇頁。  
西川知一、一九七七、『近代政治史とカトリシズム』、有斐閣。

松尾秀哉、二〇〇〇、「キリスト教民主主義政党の『調停の政治』メカニズム——ベルギーにおける初期福祉国家改革期のカトリック党の党内政治過程——」『国際関係論研究』第一五号、五九—八五頁。

水島治郎、二〇〇一、『戦後オランダの政治構造——ネオ・コーポラティズムと所得政策』、東京大学出版会。

\* 本稿は、文部科学省科学研究費補助金（二〇〇四—二〇〇五年度基盤研究（C）（1）「キリスト教民主主義と西ヨーロッパ政党制」）による研究成果の一部である。